

づけるあるという話しが出てきていて、確かにそうだろうとも思ひませんけど、僕が読んだ時は、自分がゲストといふよりAIの方に感情移入をしていたと思います。僕の作品では、観客が舞台上で行われていることを、距離をもって感じたり、楽しむものではなくて、舞台上で起こっていることと一緒に巻き込んでいくような状態を目指している。それを考へると、観客はゲストではなくてAIの側のなかなあと思います。

『グラン・ヴァカンス』を いま召喚することのアクリティ

佐々木 大橋可也版『グラン・ヴァカンス』を論じる時の一つの大好きなポイントになってくると思うのは、結局「人間」の話をしているんだ、ということだと思います。AIの話をすることによって初めて浮かびあがってくる「人間」の話があるのだということです。それはある意味では、すべてのAI的な存在が登場するSFの基本命題だと思いませんが、なぜ『グラン・ヴァカンス』をダンサーがやるのか、ということを考えた時、一つは既に話してきている「なぜSF小説の、それも『グラン・ヴァカンス』なのか」ということ。もう一つは「それを今やることのアクリティアリティは一体どういいう問題意識と接続されているのか」という問題になります。大橋さんはダンスとか舞踏と呼ばれる芸術ジャンルの中での発展とか進化とか変容みたいな問題だけじゃなくて、それらが今現実の状況、社会と呼ばれるものとかわるアクリティアルな問題系と、一体どういいう風に関連がつけられていかうかということに意識的に取り組んできたんだと思うんです。そういう問題意識と『グラン・ヴァカンス』という小説を召喚するということは、間違いなく連続しているはずで、最終的にはそこが大きなポイントにならうと思う。

藤田 稲吉はすずっと見ていると、生身の人間が振付によつて操られているわけだから、徐々に人間じゃなく見えてきて、操り人形みたいな不気味さも出てくるわけですね。例えば人間と、AIのような人間にやないものの境界が曖昧に感じやすくなっている現実があつ。それと『グラン・ヴァカンス』が同時代性を持っていて、このダンス作品と繋がっているということは、よく分かる。とはいひ、あのダンサーの動きというのは、過剰で、突出しているように見える。見たことが無い何か表しているような感じがして、同時代性を持ちながらも、異質な何かを持ち込んでいる感じがします。なぜゼンテンボンラリーダンスとして、「この動き」について、『グラン・ヴァカンス』を表現しようと思われたのでしょうか。

佐々木 今の指摘がすごく鋭いところをついているなと思ったのは、一つはその原作小説の中に出でてくるAIは、AIだという前提で僕は読んでいたんだけど、実際のキャラクターとしてはむしろ非常に人間的だし、普通の意味で登場人物的であるわけです。だからこそ読者が感情移入して、悲惨な目に合う悲しい気持ちになつたり、残酷な目に合つとショックを受けるんだけれども、我々はそれがAIだという情報を小説の言外の説明としてもあらかじめ知った上で読んでくるからAIだと思っていて、描かれ方はほとんど人間なんですよ。どちらかというと原作の小説では、外からやって来るゲストの方が人間が無いけれど。僕がよくたとえに出すのはPerfumeと初音ミクなどだけど、だんだん機械が人間っぽくなつていて、人間が機械っぽくなつていて、どうプロセスがあるとする。機械の声がだんだん人間っぽくなつていて、人間の声がだんだん機械っぽくなつていて、最終的にはクロスして、機械は人間のものになり、人間は機械のものになるんだけれど、その手前に、いわゆる“不

気味の谷”と呼ばれるものがあって、何か気持ちの悪いことが起きるわけですね。それにある意味で近いことはこの話にも言える。さっき藤田君が過剰と言つたけれども、何からかの過剰なやりや、逆に他の要素を極端に削ぎ取つて、ひとつの収斂された動かにしていくのは大橋さんの振付の一つの特徴である。そのアプローチが、おそらく原作の人間味の描き方とは逆転している、といふことだと思うんです。誰がどう見つけて目の前にいるのは生身のダンサーであつて、そこは消せない。それに限らず、これはAIなんだっていう前提を、観客がどこかで共有しながら見ると、そこに何が起きるのかってことですね。どこまでいっても生身の人間であるという当たり前の大事と、AIであるということの反転の連鎖みたいなものが、この舞台の一つの核心になつてゐるのかなと思う。『グラン・ヴァカンス』だから、あの動きになっている、っていうことではないんじゃないかも思ひます。最終的にはそういう風に見えるべきなんだけれども、これまでダンサーが身体に対してやつて来たこと、小説『グラン・ヴァカンス』におけるAIという存在の扱いの中に、シンクロする部分があるとも思ひます。その後佐々木さんの影響もありゼロ年代SFに触れるようになって、順序としては円城さんとか伊藤さんとかを読んで、その後で『グラン・ヴァカンス』に出会つたんです。ついに出会つた。

佐々木 それは面白いですね。日本が八百万の神の国であること、SNSが死ぬほど流行る国であることが全部合致している。今の問題提起は、まさに『グラン・ヴァカンス』ダンス版のアクリティアリティとそのまま接続していける話だなって思います。2011年3月11日震災と原発事故があって、それ以降に一体何という作品を作つていいのかなということ、そんな中で、この『グラン・ヴァカンス』が何をするのか、ということについてはどうでしょうか？

大橋

僕は世代のはウリアム・ギブソンなどのサイバーパンクが日本に紹介されたころに学生で、当時はよく読んでいたのですが、しばらくSFは読んでいかなかったのだとすると、今回の大橋さんの振付では、一体何が狙われているのか？というところなんですね。大橋が、さっき藤田さんから、過剰という表現がありませんが、僕は通常を逸脱しているというよりも、すごく日常だと思ひんでね。滅多に目にすることは無いかもしれないけど、車に跳ねられた人はこんな動きをするかもしないし、稀ではあるかもしれないけれども、あり得るい可能性がある。先ほど藤田さんも記憶という話をされてしまひたけど、個人が持つている記憶や、社会が持つっている記憶の中、あらゆる動きを振付にする作業ではないかと思います。

佐々木 SF読者の方々にもこれを観てもらうとして、でも「え、何これ？全然違うじゃん！」って反応になる可能性もある（笑）。もちろんそなつも良いんだけど。

藤田 身体の動作を通じて、見えないところにある内容を浮かび上がらせようとしている、そこが面白いですね。空間上に何か見えないネットワークが張り巡らされている感じのものを観客が体験することで、仮想空間と現実空間がまるで重ね書きされているような印象を与える。人間が機械のように感じられて機械が人間のように感じられる世界の中で、SF作品を物理空間の中で身体によって表現することで、アクリティアリティの軸みが確かにここに生まれている。

佐々木 本作は、SF小説をダンス化した時にどんな軸みが生じるのか、その軸みの部分こそ今見るべきところだと思います。だから『グラン・ヴァカンス』がすごく好きかなって。原作ファンも、どう観たら良いのか、焦点化しやすいと思う。本作は、SF小説をダンス化した時にどんな軸みが生じるのか、その軸みの部分こそ今見るべきところだと思います。だから『グラン・ヴァカンス』がすごく好きかなって。原作ファンも、どう観たら良いのか、焦点化しやすいと思う。

大橋 「不気味の谷」ってすごく面白いですね。“不気味の谷”は人間でないものが人間に近づいてきた時に起きた違和感ですが、僕は、ダンスを見る感覺はそれに似ています。歌舞伎を見たときに、舞臺上での見つけた違和感が、僕はそれを継承してきたもの1人だと思っていますが、一方、3.11以降ここから何をやっていくか、作品として何を取り組むのかという迷いもありましたし、実際に行き詰まっています。そこで自分のルーツである舞踏がもともと持つてゐる人間への取り組み方を、突き詰めるべきじゃないかと考えていた時に、『グラン・ヴァカンス』との出会いがあった。そこははある意味、目指すことの一一致を見たと思うんですね。直接的な契機としては、飛さんもエッセイを寄せている神林長平さんの短編集『いま集合の無意識』を読んでいたところです。そこには、物語を圧縮して舞台作品にしまして、そこから『グラン・ヴァカンス』に取り組もうと考えたんです。

佐々木 それでは、僕がやってきた舞踏の振付は、人間を解体していく物質と同化させていく、石でも壁でも壁でもありますし、そういうものもあり得るというポストヒューマンの時代の在り方を模索していくための技術。振付はそのための技術。それをやったのが土方翼の暗黒舞踏だと僕は解釈しています。僕はそれを継承してきたものの1人だと思っていますが、一方、3.11以降ここから何をやっていくか、作品として何を取り組むのかという迷いもありましたし、実際に行き詰まっています。そこで自分のルーツである舞踏がもともと持つてゐる人間への取り組み方を、突き詰めるべきじゃないかと考えていた時に、『グラン・ヴァカンス』との出会いがあった。そこははある意味、目指すことの一一致を見たと思うんですね。直接的な契機としては、飛さんもエッセイを寄せている神林長平さんの短編集『いま集合の無意識』を読んでいたところです。そこには、物語を圧縮して舞台作品にしまして、そこから『グラン・ヴァカンス』に取り組もうと考えたんです。

大橋 「不気味の谷」ってすごく面白いですね。“不気味の谷”は人間でないものが人間に近づいてきた時に起きた違和感ですが、僕は、ダンスを見る感覺はそれに似ています。歌舞伎を見たときに、舞臺上での見つけた違和感が、僕はそれを継承してきたもの1人だと思っていますが、一方、3.11以降ここから何をやっていくか、作品として何を取り組むのかという迷いもありましたし、実際に行き詰まっています。そこで自分のルーツである舞踏がもともと持つてゐる人間への取り組み方を、突き詰めるべきじゃないかと考えていた時に、『グラン・ヴァカンス』との出会いがあった。そこははある意味、目指すことの一一致を見たと思うんですね。直接的な契機としては、飛さんもエッセイを寄せている神林長平さんの短編集『いま集合の無意識』を読んでいたところです。そこには、物語を圧縮して舞台作品にしまして、そこから『グラン・ヴァカンス』に取り組もうと考えたんです。

佐々木 それでは、僕がやってきた舞踏の振付は、人間を解体していく物質と同化させていく、石でも壁でも壁でもありますし、そういうものもあり得るというポストヒューマンの時代の在り方を模索していくための技術。振付はそのための技術。それをやったのが土方翼の暗黒舞踏だと僕は解釈しています。僕はそれを継承してきたものの1人だと思っていますが、一方、3.11以降ここから何をやっていくか、作品として何を取り組むのかという迷いもありましたし、実際に行き詰まっています。そこで自分のルーツである舞踏がもともと持つてゐる人間への取り組み方を、突き詰めるべきじゃないかと考えていた時に、『グラン・ヴァカンス』との出会いがあった。そこははある意味、目指すことの一一致を見たと思うんですね。直接的な契機としては、飛さんもエッセイを寄せている神林長平さんの短編集『いま集合の無意識』を読んでいたところです。そこには、物語を圧縮して舞台作品にしまして、そこから『グラン・ヴァ坎ス』に取り組もうと考えたんです。

大橋 「不気味の谷」ってすごく面白いですね。“不気味の谷”は人間でないものが人間に近づいてきた時に起きた違和感ですが、僕は、ダンスを見る感覺はそれに似ています。歌舞伎を見たときに、舞臺上での見つけた違和感が、僕はそれを継承してきたもの1人だと思っていますが、一方、3.11以降ここから何をやっていくか、作品として何を取り組むのかという迷いもありましたし、実際に行き詰まっています。そこで自分のルーツである舞踏がもともと持つてゐる人間への取り組み方を、突き詰めるべきじゃないかと考えていた時に、『グラン・ヴァ坎ス』との出会いがあった。そこははある意味、目指すことの一一致を見たと思うんですね。直接的な契機としては、飛さんもエッセイを寄せている神林長平さんの短編集『いま集合の無意識』を読んでいたところです。そこには、物語を圧縮して舞台作品にしまして、そこから『グラン・ヴァ坎ス』に取り組もうと考えたんです。

佐々木 それでは、僕がやってきた舞踏の振付は、人間を解体していく物質と同化させていく、石でも壁でも壁でもありますし、そういうものもあり得るというポストヒューマンの時代の在り方を模索していくための技術。振付はそのための技術。それをやったのが土方翼の暗黒舞踏だと僕は解釈しています。僕はそれを継承してきたものの1人だと思っていますが、一方、3.11以降ここから何をやっていくか、作品として何を取り組むのかという迷いもありましたし、実際に行き詰まっています。そこで自分のルーツである舞踏がもともと持つてゐる人間への取り組み方を、突き詰めるべきじゃないかと考えていた時に、『グラン・ヴァ坎ス』との出会いがあった。そこははある意味、目指すことの一一致を見たと思うんですね。直接的な契機としては、飛さんもエッセイを寄せている神林長平さんの短編集『いま集合の無意識』を読んでいたところです。そこには、物語を圧縮して舞台作品にしまして、そこから『グラン・ヴァ坎ス』に取り組もうと考えたんです。

大橋 「不気味の谷」ってすごく面白いですね。“不気味の谷”は人間でないものが人間に近づいてきた時に起きた違和感ですが、僕は、ダンスを見る感覺はそれに似ています。歌舞伎を見たときに、舞臺上での見つけた違和感が、僕はそれを継承してきたもの1人だと思っていますが、一方、3.11以降ここから何をやっていくか、作品として何を取り組むのかという迷いもありましたし、実際に行き詰まっています。そこで自分のルーツである舞踏がもともと持つてゐる人間への取り組み方を、突き詰めるべきじゃないかと考えていた時に、『グラン・ヴァ坎ス』との出会いがあった。そこははある意味、目指すことの一一致を見たと思うんですね。直接的な契機としては、飛さんもエッセイを寄せている神林長平さんの短編集『いま集合の無意識』を読んでいたところです。そこには、物語を圧縮して舞台作品にしまして、そこから『グラン・ヴァ坎ス』に取り組もうと考えたんです。

佐々木 それでは、僕がやってきた舞踏の振付は、人間を解体していく物質と同化させていく、石でも壁でも壁でもありますし、そういうものもあり得るというポストヒューマンの時代の在り方を模索していくための技術。振付はそのための技術。それをやったのが土方翼の暗黒舞踏だと僕は解釈しています。僕はそれを継承してきたものの1人だと思っていますが、一方、3.11以降ここから何をやっていくか、作品として何を取り組むのかという迷いもありましたし、実際に行き詰まっています。そこで自分のルーツである舞踏がもともと持つてゐる人間への取り組み方を、突き詰めるべきじゃないかと考えていた時に、『グラン・ヴァ坎ス』との出会いがあった。そこははある意味、目指すことの一一致を見たと思うんですね。直接的な契機としては、飛さんもエッセイを寄せている神林長平さんの短編集『いま集合の無意識』を読んでいたところです。そこには、物語を圧縮して舞台作品にしまして、そこから『グラン・ヴァ坎ス』に取り組もうと考え